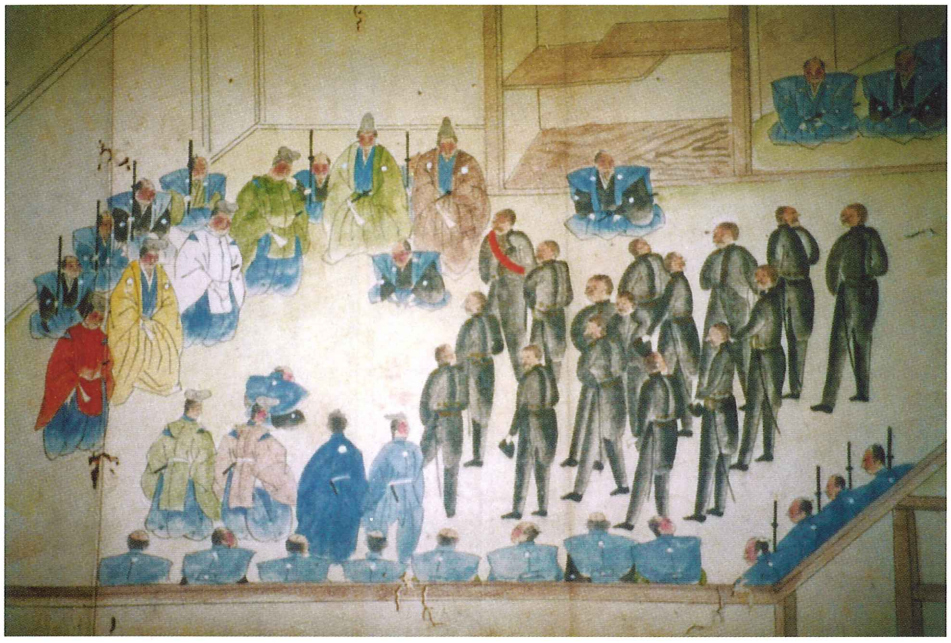
《第 19 回》

平成14年度附属図書館貴重資料展

永青文庫の中の「明治維新」

【出品目録】



魯西亜人応接図（永青文庫蔵熊本大学附属図書館寄託）

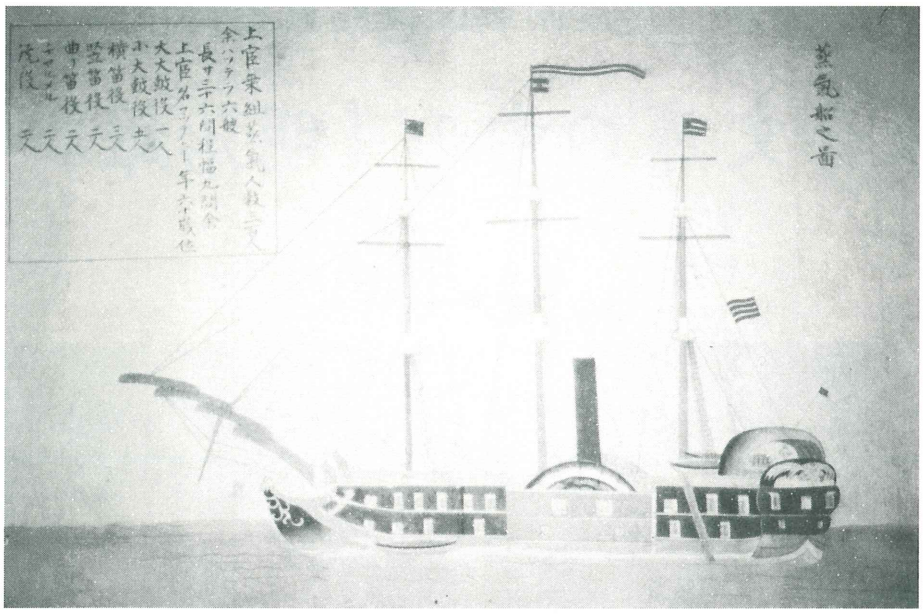
《展　示　会》

期間　平成 14 年 11 月 2 日（土）～ 4 日（月）
会場　附属図書館 自由閲覧室　入場無料

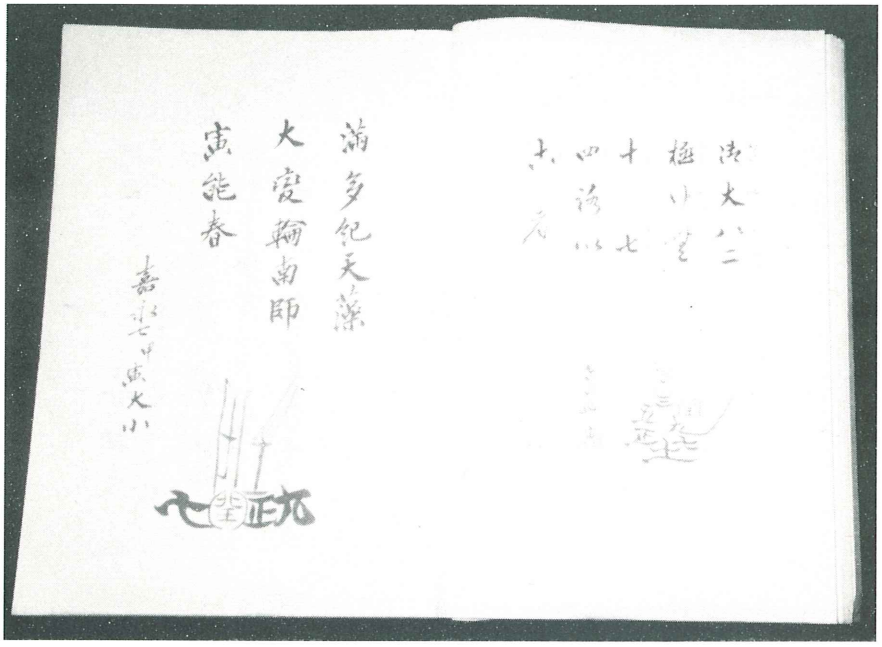
《公開講演会》

演題　永青文庫の中の「明治維新」
講師　熊本大学文学部助教授　三澤　純 氏
日時　平成 14 年 11 月 2 日（土）
　　13時30分～15時
会場　附属図書館大会議室（2F）　入場無料

熊 本 大 学 附 属 図 書 館



写真Ａ　「蒸気船之図」（永青文庫蔵 熊本大学附属図書館寄託）



写真Ｂ　「亜墨利加狂歌集」に掲載された絵暦
（永青文庫蔵 熊本大学附属図書館寄託）

（１）「文化元年子九月ヲロシヤ船渡来来仕候ニ付従御奉行所御検使被差出御糺方並ヲロシヤ人ゟ願出候一件記録之内先立而差上置候抜書之続」　整理番号８―１―２５
（２）「ヲロシヤ人御奉行所江呼出之節市中警護絵図」　整理番号８―１―２５
（３）「異国江漂流仕候陸奥国之者四人口書」　整理番号８―１―２５
（４）「おろしや国ゟ帰国之漂流人共申立候様子書」　整理番号８―１―２５
（５）「異国漂流人四人之者共持戻り之品並於彼国貰請候品立書付」　整理番号８―１―２５

史料（１）～（６）は，ペリー来航以前のもので，本資料展のプロローグに当たる。

文化元年（1804）年９月７日，ロシア使節レザノフが長崎に来航した。その目的は，仙台藩石巻出身の津太夫等４名の漂流民を護送することと，通商を要求することであったが，長崎奉行は後者についての交渉には一切応じないという強硬な態度に終始した。レザノフ一行は，米蔵を改造した宿舎で越冬し機会を待ったが，ついに文化２年（1805）３月19日に長崎を退去した。

史料（１）はこの間の長崎奉行側及びロシア使節側の動向を逐一記録したもの。史料（２）はレザノフ一行が，３月６日に立山役所に呼び出された際の警護絵図。この時にレザノフ一行を引見したのは，江戸から派遣された幕府目付・遠山景普（かげみち）だが，彼はいわゆる「遠山の金さん」として名高い遠山景元の父である。史料（３）は漂流民４人の取調書で漂流から帰国まで11年にも及ぶ期間の顛末が書かれており，史料（４）にはロシアの自然，地理，ロシア人の生活の様子等が記されている。また史料（５）は帰国時の彼等の持ち物リストである。中には「銀扶時計」「横文字本」「世界図」等が見える。なおこれら一連の情報の提供者は，長崎の熊本藩蔵屋敷に出入りしていた楢林彦四郎という人物である。

（６）「琉球江渡来之仏郎人応答書」　整理番号８―１―１７３

史料（６）には，弘化元（1844）年３月に琉球へ来航し通商を求めたフランス人と，琉球政府吏人との応答書の和訳及び天保11年（1840）に勃発し，13年に終結したアヘン戦争（イギリスと清国との戦争）についての情報書が合冊されている。どちらも漢文で記された原文を，儒者であり，後に時習館訓導になる木下宇太郎（韡村）が和訳をしている。

（７）「蒸気船之図」（写真Ａ）　整理番号１０６―５―天３８
（８）「本牧表御警衛一巻」　整理番号１３―１―１０

嘉永６年６月３日（1853年７月８日），アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが軍艦４隻を率いて浦賀に来航した。この時の世情の大騒ぎ振りは，「泰平のねむりをさますじようきせん，たつた四はいで夜るも寝られず」という有名な狂歌によく示されている。同時にペリーとその艦隊には，庶民の大きな関心が集まり，たくさんの絵が描かれ，売り出された。史料（７）は，おそらく江戸で購入したものと考えられる。

史料（８）は，ペリー来航の第一報を熊本に届けた飛脚が６月16日夜半に到着したことが分かるもの。熊本藩は翌17日，世子慶順に江戸からの書状を見せて報告すると同時に，家老の松井家及び米田家へ書状を送っている。

（９）〔黒船図〕　「恕斎日録」（日本史研究室蔵）
（10）〔黒船図〕　「恕斎日録」（日本史研究室蔵）

（11）〔黒船図〕　「恕斎日録」（日本史研究室蔵）

史料（９）～（11）は，いずれも熊本藩の地方役人・中村荘右衛門（当時は阿蘇・南郷郡代）の日記に挟み込まれた黒船の図。中村の日記に初めてペリー来航の記述が現れるのは，同年６月18日のことであり，先述した藩庁への第一報と比較すると，中村の情報入手の早さに驚かされる。なお（９）は７月18日条に存在する。中村はその後も城下と阿蘇とを行き来する生活の中で，熱心に黒船情報を集めており，この図も江戸から送られてきた書状に同封されていたもの，もしくはそれを中村本人が書き写したものと思われる。

中村は，嘉永７年の二度目のペリー来航の際にも日記に挟み込む形で黒船の図を残している。史料（10）（11）がそれだが，この時は，嫡子嘉一郎が大砲手として浦賀に出陣していたため，この図を含めて彼から直接情報を仕入れており，図の正確さも史料（９）に比して格段に増している。

（12）「武相上房本牧ノ図」　整理番号１０６―５―３７
（13）「亜墨利加人上陸」　整理番号１０６―５―天３５
（14）「浦賀之図」　整理番号１０６―５―３９

ペリーの最初の来航時の滞在期間は僅か９日間であった。この間，６月９日（西暦では７月14日）に久里浜に上陸し，浦賀奉行戸田氏栄・井戸弘道にアメリカ大統領国書を手交した。史料（12）（13）（14）はともに日本の歴史上，一大画期となったこの日の様子を描いた絵図である。この三つの絵図を並べて見ると，それぞれの作成意図を越えて，一つの連続した視線を確保することができる。すなわち（12）はペリー艦隊が久里浜に近づく場面，（13）は上陸直前の場面，（14）は上陸後の場面を描いていることが分かるのである。

（15）「合衆国書翰和解写」　整理番号１３―１―２４
（16）「合衆国伯理璽天徳書翰和解写」　整理番号１３―１―２４
（17）「上」　整理番号１３―１―２４

ペリー来航時の老中阿部正弘は，嘉永６年６月15日（ペリー退去の３日後）に，この大事件を朝廷に上奏するとともに，７月１日には，開国と通商とを求めるアメリカ大統領フィルモアの国書を諸大名に示し，対応策について諮問した。史料（15）（16）は，その時に幕府から渡された国書の日本語訳写である。なお，史料（16）中の「伯理璽天徳」は「President」の当て字である。

阿部の諮問を受けて，諸大名は自らの意見を披瀝する必要に迫られることになった。この時には，開戦論や積極的交易論など明確な主張は少なく，「平和的な処置をなしながら，通商要求については拒否する」という意見が多数を占めた。史料（17）は，ときの熊本藩主細川斉護が幕府に提出した意見書の控えである。同年８月の記載があるこの意見書の内容は，先に述べた多数意見に分類されうるものである。

（18）「魯西亜書牘和解」　整理番号１３―１―２４
（19）「魯西亜人応接図」（表紙写真）　整理番号１０６―５―天３４

嘉永６年６月12日（1853年７月17日）にペリーが浦賀から退去してから，ほぼ１ヶ月後の７月18日（西暦では８月22日），今度はロシア使節プチャーチンが軍艦４隻を率いて長崎に来

航し，国書受理を要求した。プチャーチン艦隊の日本滞在は，長崎・上海・マニラ間の往復を挟みながら，安政２年３月（1855年５月）まで続いた。

史料（18）は，長崎来航時にプチャーチンが持参したロシア皇帝ニコライ１世の国書の日本語訳写で，国境確定と開国通商とを要請している。史料（19）はおそらく嘉永６年８月19日（西暦では９月21日）にプチャーチンが上陸し，長崎西役所で国書を手交した日の一連の場面を描いたものと推定される。

（20）元田永孚「覚」　米田家文書１３４
（21）内山牧山「浮台場仕法」　米田家文書１４６
（22）「御道押しらべ」　米田家文書１６４

嘉永６年11月に，幕府は彦根藩以下９藩に関東沿岸の警備を命じたが，特に熊本藩には江戸湾入り口として重要な位置を占める相模沿岸の警備の命を下した。同年12月11日に，家老長岡監物が相州警備総帥として熊本を出発する前後には，彼の元には数多くの海防意見書が集まることとなった。史料（20）（21）は，その中の２点であるが，前者は，後に明治天皇の侍講となり，教育勅語の起草にも携わった元田の若き日の意見書，後者は，浮台場（浮砲台）という奇抜なアイディアを書き記したものである。史料（22）は相模までの行列の順序を記録したもの。

（23）「異国船渡来ニ付諸家様〻御届諸方〻之注進状並外聞書付」　整理番号１３―１―２０
（24）「相州御備場御用一件」壱番・弐番・三番・四番　整理番号１３―１―１～４
（25）「相陽海岸一覧」　整理番号８―４―22―丙
（26）「相房海岸略図」　整理番号８―４―８―丙
（27）「相州御備場絵図」　整理番号８―４―丙―75
（28）「観音崎御台場之図」　整理番号８―４―４―１―丁
（29）「猿島御台場之図」　整理番号８―４―44―丁

熊本藩が相州警備を担当している間，相模・武蔵両国のうち１万４千石余りの村々が熊本藩の預かり地となった。史料（23）（24）は嘉永６年から始まる，その預かり地における統治記録の一部である。また史料（25）～（29）もこの前後の時期に多数，作成ないし購入された絵図のうちの一部である。

このうち史料（25）は嘉永元年（1848）段階のもので，熊本藩が相州警備を担当することになったことを受けて購入されたものと思われる。また史料（26）もペリー来航以前（嘉永３～４年）のもので，後に池田屋事件で新撰組に襲われ自刃する，熊本出身の宮部鼎蔵が作成した絵図である。宮部は山鹿流兵学の知識をもとに，江戸湾の「咽喉ノ地」は，「房総半島側の富津と三浦半島側の猿島との間にある」と述べている。

史料（27）はペリー来航後に作成されたもので，熊本藩預地や長州藩預地，浦賀奉行支配地が色分けして描かれている。

（30）「亜墨利加狂歌集」（写真Ｂ）　整理番号１０６―５―３２の１～２
（31）「亜墨利加狂歌集」　整理番号１３―１―５４

ペリー来航直後，江戸の諸藩藩邸には幕府から江戸湾各所の防備が命じられた。熊本藩に

も，嘉永6年6月7日，幕府からの本牧警備命令が達せられ，翌8日に出兵，9日には本牧に到着している。こうした熊本藩の対応の迅速さと軍備の十分さは，江戸庶民から高い評判を勝ち取ることとなった。その様相は，「細川の水で入れたる上きせん，四はいくらいはたつた一トのみ」という狂歌が流行するほどであった。熊本藩はこの高評価に気をよくしたらしく，数種類の「狂歌集」を買い集めているが，史料（30）（31）はそのうちの二種である。

この狂歌集には，アメリカ人を描いた挿し絵や，アメリカからの献上品リストも掲載されており，こうした書物の流布が江戸や浦賀から遠く離れて住む庶民の好奇心や恐怖心をかき立てていくことになった。

（32）「亜米利加使節対話書等」　整理番号１３―１―２１
（33）「亜墨利加国条約並税則」　整理番号１３―１―２８
（34）「英吉利国条約並税則」　整理番号１３―１―２８
（35）「仏蘭西国条約並税則」　整理番号１３―１―２８
（36）「阿蘭陀国条約並税則」　整理番号１３―１―２８
（37）「魯西亜国条約並税則」　整理番号１３―１―２８

二度にわたるペリー来航の結果，嘉永7年3月3日（1854年3月31日）に，日米和親条約が締結された。その後，ほぼ同趣旨の和親条約が欧米諸国との間で結ばれ，日本は遂に開国されることになった。永青文庫には，この和親条約の写は存在していないが，いわゆる「安政の五ヶ国条約」と総称される，安政5年（1858）に締結された修好通商条約の写は全て揃っている。史料（33）～（37）はそれに当たるが，特に史料（32）は安政4年12月11日から開始されたアメリカ総領事ハリスとの通商条約交渉の詳細な記録の写である。

（38）「対州魯西亜渡来一件」　整理番号８―１―２６
（39）〔芋崎浦絵図〕　整理番号８―１―２６

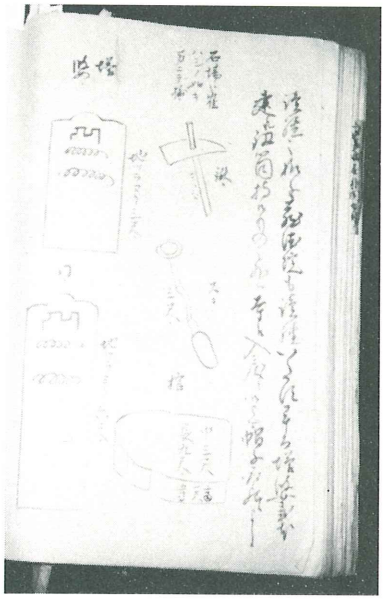
開国からまもない文久元年（1861）2月，ロシア軍艦ポサドニック号が対馬の浅芽湾を占拠し，島民と紛争を生じるという事件が発生した。ポサドニック号は，結局，この年の8月に退去したが，この半年間，ロシア領事との交渉が何度も行われたり，軍事的要衝をロシアに押さえられることを懸念したイギリスが対馬に軍艦を派遣したりと，大きな波紋が巻き起こった。史料（38）（39）は，この事件の様子を熊本藩の長崎留守居・長塩庄兵衛が，藩庁に知らせた書類の一部と絵図である。

（40）「小倉出張図」　整理番号８―４―３７の２
（41）〔蒸気船運送会社引札〕（写真Ｅ）　整理番号１３―４―２８の２

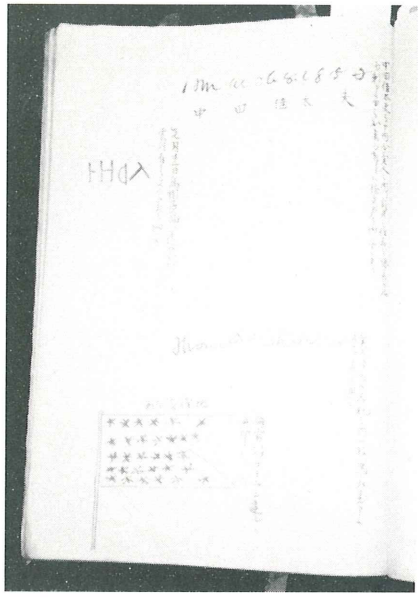
本資料展のエピローグとして，全体の筋書きからは少々はずれるが，興味深い2点出展した。

史料（40）は，慶応2年（1866）6月に勃発した第二次幕長戦争の様子を描いたものである。熊本藩はこの戦争に幕府方の有力メンバーとして参戦するが，この絵図には長州方との激しい戦闘の有様が生々しく描かれている。ここでも戦闘の主力は，幕府方・長州方ともに蒸気軍艦である。

史料（41）は，明治３年（1870）の「従東京西京之下廻」という簿冊に綴り込まれた蒸気船運送会社の引札（広告チラシ）である。ペリー来航から17年，蒸気船は内乱の主役という役割を経て，大量物資運送機関として新たな歩みを始めたことになる。



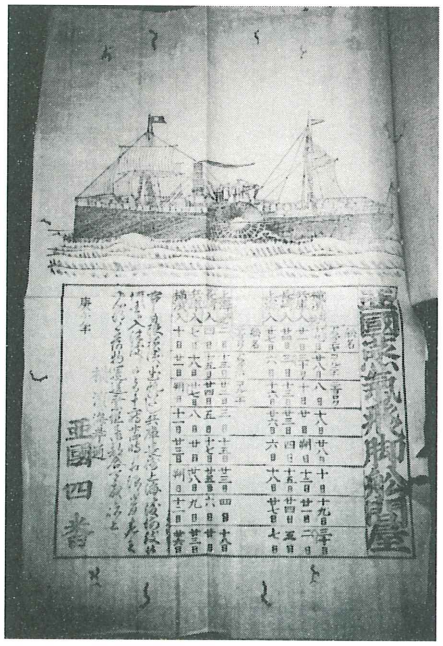
写真Ｃ　英語表記の例



写真Ｄ　　同左

Ｃ・Ｄともに史料23より

（永青文庫蔵 熊本大学附属図書館寄託）



写真Ｅ　蒸気船運送会社引札

（永青文庫蔵 熊本大学附属図書館寄託）

《第19回》
平成14年熊本大学附属図書館貴重資料展

永青文庫の中の「明治維新」

発行　平成14年10月8日
執筆・編集　三澤　純
発行　熊本大学附属図書館
主催　熊本大学附属図書館
協賛　財団法人　永青文庫